　思わず一同の視線が集中する。
　注目の先にいたのは、灰色の髪を後ろでまとめた、目つきのきつい、白衣姿の高齢男性である。
「あ」
　ロインは立ち上がり、会釈をした。
「誰？」と、ノアがリアムに耳打ちする。
　それが聞こえてしまったのか、男性は嫌そうな顔をして、
「また部外者を連れ込んでいるのかね」
「すみません、教授」
「この研究室は、いつから部外者と語らう憩いの場所になったのかな？」
　教授と呼んだ男性に睨まれ、ロインもまたムッとした。
　への字口の教授は下顎だけを動かし、
「もう明日の前夜祭の準備は終わったのかね？」
「いえ、この研究に区切りをつけてからの予定です」
「研究というのは、その鉱石か？」
　教授は机上にある鉱石を一瞥（いちべつ）すると、
「そんな手垢に塗れたものの観察など後からでいい。今さらそんなゴミに新発見などあるはずがないのだから。――すぐにホールへ準備に行きたまえ」
　鼻を鳴らして部屋を出た。
「すまない、みんな。明日の準備と研究が一段落するまで待ってくれないか」
「明日の準備？」
　話を伺うに、前夜祭とはシェンティアの五周年を祝うもので、ロインが駆り出される準備は懇親会にまつわるものだという。明日、ネイクス大陸から要人の来賓があるため、分館の生徒がもてなしの用意をする手筈になっている。
　ネックは苦笑いしながら、
「忙しい時にこっちこそ悪かったな」
「いや、漂着物の研究は本分だ。どれだけ記憶に迫れるかはわからないが、彼女……ノアについて深く知るのは、俺たちにとっても有益なことだと思う」
　ロインは眼鏡のブリッジを上げて、
「学生寮の場所はわかるな？」
「ああ、街の東だろ」
「十七時頃、俺の部屋に来てくれ。役立ちそうな資料を探しておく」
　ノランを先行してぞろぞろと研究室から出ていく中、リアムがあっと振り返った。
「最初に渡せば良かったね。はい、頭使いっぱなしで疲れるでしょう？」
　リアムは、市場で買ってきたパンの包みをロインに差し出した。
「栄養補給しないとね」
　ロインはほのかに頬を赤くし、差し出された包みを受け取った。
「……い、いつもありがとう」
　ロインはネックたちを見送ると、ホールへ向かった。そうして研究室を出て、廊下へ走ると教授がロインの顔も見ることなく、
「まったく、君は遊んでばかりだな。そんなんでは本館の研究など一生かかっても無理だろうな」
「……」